平成 20 年度研修員　南部 成子さんの声

プロフィール

中学・高校時代をバンコクで過ごしたことがきっかけで、国際協力に関心を持ちました。ボストンの大学院では国際教育開発学を専攻し、卒業後は貧困層に対する患者教育を、そして赤十字で人道支援の経験を積みました。研修中は UNHCR エチオピア事務所でエリトリア難民キャンプにおけるコミュニティ・サービス提供を担当しました。現在は UNHCR エチオピア事務所で難民支援を続けています。今後は、JPO 制度で派遣され、国連機関で働く予定です。

１．平和構築人材育成事業に応募した理由を教えてください。

本事業について知ったのは、前職の仕事がひと段落し、次の道を考えていた時でした。「応募締め切り間近」と題されたそのメールを見たのは、締切一週間前。事業の内容をウェブで拝見しましたが、とにかくやりがいがありそう！との印象を受け、急いで書類を揃えて応募しました。

中学・高校時代を開発の光と影に翻弄されるバンコクで過ごしたこともあり（20 年前のバンコクは今と違ってずいぶん混沌としていたのです）、国際協力を一生の仕事とすることは既に決めていました。バンコクではインターナショナルスクールに在籍し、多国籍の同級生・教員たちと共に国際情勢を身近に感じながら成長しました。湾岸戦争の際にはクラスメートの祖国の親族が徴兵された、故郷が戦禍に巻き込まれたということもありました。アメリカ人の生徒が多く在籍しているという理由から、爆弾を仕掛けたという脅迫電話がかかってきたこともありました。クーデターの際にはバンコクに戒厳令が敷かれ、買い物に出かけた教員が混乱のなか殺害されるという事件も起きました。そのような経験から、国際協力の中でも平和構築分野には強い関心を抱いていましたが、実際に仕事としてどう関わっていけるのか、漠然としたイメージしかありませんでした。それを正に実現しようとしているのが当事業であると感じました。

事業内容で特に目を引いたのが、平和構築に従事する若者を広島で育成するという点。また、参加者の半分はアジアからの研修員であるという点でした。これは、ただ国連等の国際機関に人を送り込む事業ではなく、アジア人研修員たちと共に、国際社会に対して平和のメッセージを打ち出す事業なのではと感じました。平和都市広島が訴えるものは大きくとも、海外においてはまだ理解が足りないと感じていたこともあり、この事業に積極的に携わりたいと強く思いました。

２．　国内研修の感想は？

大変刺激的でした。まずは講師陣。国際協力の前線で働いている方々から直接お話しを伺うことが

でき、この業界で自分がどのような役割を担っていくべきか、熟考するきっかけになりました。また、外界からぷっつり遮断された広島の奥地の研修所で過ごしたことにより、研修員同士の絆が強まりました。多様なバックグラウンドを持った仲間と一ヶ月間衣食住を共にし、学ぶ。このような機会は今後の人生においてもなかなかないと思います。これから各分野で活躍していく仲間ですが、いつでも電話一本で協力し合える関係が築けたことは、なにものにも代えがたい財産となりました。

３．　海外実務研修での活動について教えてください。

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）に国連ボランティア計画（UNV）を通じて派遣されました。任された仕事は、エチオピア北部にあるエリトリア難民キャンプにおいてコミュニティ・サービスを提供すること。特にエリトリア難民キャンプにおいては80%以上が兵役を逃れてきた若い男性であることから、脆弱な立場にある女性・子供・老人・障害者を対象とした早急な支援体制作りが求められました。

［南部さんと子供たち］

担当した難民キャンプは設立から半年しか経っていなかったこともあり、各施設も仮設状態でした。そのため、コミュニティ・サービスに関してはニーズ調査から始める必要がありました。家族からはぐれた子供たちを特定するところから始まり、彼らのカウンセリングを行いました。子供たちの中には、家族と一緒にエチオピアへ逃れてきたものの、ある日突然難民キャンプの中に一人取り残されてしまった、といったケースも多く見られました。涙を必死に堪えながら話す子供たちと向き合いながら、解決策を模索しました。

しかし、このようにスタッフ一人が事例に取り組むというのは長期的な解決にはなりません。子供たちがしっかりとしたケアを受けることができるよう、地元政府・NGO・難民コミュニティと共に支援体制を構築する必要があります。赴任中には、子供の支援を専門とした現地NGOへの事業委託準備を進め、同時に地元政府と難民コミュニティとの情報共有体制を強化し、支援を必要としている子供たちの特定が効果的にできるよう、体制を整えました。

これは他の脆弱な立場にある難民に関しても同様で、難民キャンプの中で声を上げずに困っている

女性・老人・障害者を早期発見し、長期的な支援を行っていくためには、スタッフが一人走り回っている状態では効果が期待できません。彼らのニーズを把握しながら、地元政府・NGO・難民コミュニティとの協力体制を強化していきました。

現地事務所ではインターナショナルスタッフ10人と現地スタッフ20人ほどで二つの難民キャンプを担当していましたので、めまぐるしい毎日でした。乾季のため砂嵐が巻き起こる中、難民たちから話を聞き、担当者たちと計画を詰めていく。砂まみれになって帰ってくれば停電・断水でシャワーが浴びられない・インターネットがつながらないのでレポートが送れない・携帯電話も繋がらない、という状況も時にはありましたが、常に前向きな同僚たちに励まされ、特に大きな病気もせずに仕事をすることができました。

４．海外実務研修の感想は？一番印象に残っていることは？

［南部さんとエチオピア北部のティグレ州の子供］

毎日学ぶことの連続でした。難民について多少は知っているつもりでしたが、やはり百聞は一見にしかず。現場で（物理的に･･･）毎日砂まみれになりながら学んだことは貴重な体験となりました。特に上司は良い意味での放任主義で、難民キャンプへ同行してくれたのは最初の一週間のみ。その後は全面的に仕事を任せてくれました。反面、それは自分で調べ、計画し、実行していかなければならないということ。コミュニティ・サービスという分野自体が初めての経験だったのですが、体当たりで仕事をすることにより、多くのものを吸収することができました。また、国連の雰囲気を実際に感じることができたのも、この研修の大きな成果でした。組織の雰囲気に合うか合わないかというのは、仕事を続けていく上でとても重要な要素だと考えます。

UNHCR に関しては、派遣準備段階から東京事務所やジュネーブ本部の先輩方にお世話になり、現場においては 10 ヵ国からなる多国籍スタッフと共に汗を流しました。出会った全ての方々に共通して言えることは、それぞれが強い信念を持っており、仕事が迅速でかつ丁寧であること。ロールモデルとなる先輩方が多数所属する組織で仕事ができることは、何よりの幸せだと考えています。今後も

このような先輩方と同じ職場で働きたいと強く願っています。

海外実務研修で一番印象に残っていることは、やはり難民たちの強さです。コミュニティ・サービスを提供する上では、難民たち自身が活動を持続していけるよう留意する必要があります。苦境のなかにある難民たちが果たして力を貸してくれるのか、最初は不安もありました。それは難民たちにとっても同じで、必要なものを要求することには慣れている彼らも、私が「一緒に考えよう、一緒にやろう」と言うと、初めは戸惑った表情が目立ちました。自分たちには難民キャンプの環境を変える力はないと考えていた彼らにとって、「一緒に作り上げる」という発想は予想外だったようです。しかし、一旦彼らに主導権を渡すと、アイディアが湧きだし、資金がなくても自分たちで活動を生み出してくれました。自ら企画したイベントに参加する時の表情は、政府やUNHCR主体のイベントに参加するそれとは全く異なり、生き生きとしていました。難民は常に脆弱な立場にあると思い込んでいた私にとって、これは嬉しい驚きでした。難民キャンプを見渡せば、UNHCRの援助なしでもレストラン・カフェ・映画館・携帯電話レンタル屋・仕立て屋・ゲームショップ等の小規模ビジネスが成り立っています。もちろんこれはある程度裕福な難民が経営しているのですが、皆が力を合わせて土レンガをせっせと作るところから始めている姿を見ると、難民たちの底力を感じずにはいられません。女性や子供たちも、どんな苦難に遭っても笑顔を忘れずに生きています。彼らが自分たちの強さを十分に活かせるようにサポートするのが我々の役目であると、今回の派遣を通じて改めて気付かされました。

５．今後のキャリア・プランを教えてください。

UNHCR から契約延長の話をいただきましたので、エチオピアに戻ります。4ヵ月間では終わらなかった支援体制作りに取り組み、難民の方々が安心した生活を送れるよう、彼らと共に環境を整えていきたいと思っております。また、JPO（注：ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー。国連機関への派遣制度）に合格しましたので、赴任地は問わず、UNHCRで引き続きコミュニティ・サービスの仕事を続けていく予定です。

［南部さんと同僚たち］

私の元々の専門は教育でしたので、国連の中でも教育のバックグラウンドを生かせる仕事を希望し

ていました。コミュニティ・サービスはUNHCRにとって長い歴史がある分野ではないのですが、その分発展性があります。教育はコミュニティ・サービスを促進するうえで重要な要素の一つですが、ツールはそれだけではありません。難民の構成によって多様化するニーズを見極め、サービスを提供していく必要があります。異なる背景を持った難民が希望を持って生きることができるよう、彼らと共に取り組むのが使命であると考えています。

６．平和構築人材育成事業への参加を考えている方にメッセージをお願いします。

これほど満足度の高い研修は他にないように思います。本事業を通じて構築できるネットワークは一生の宝となります。また、日本政府が全面的に力を注いでいる事業ということもあり、政策の中枢にいる方々の熱い気持ちに触れることができます。日本人として国際協力に関わることの意味を改めて考えさせられた事業でした。

キャリアの面では、この事業はまさに登竜門です。特に国連機関の場合、フィールド経験があるか、そして人を知っているかが大きな鍵となります。エチオピアの僻地に送り込まれたことにより、難民支援の実態を学び、多くのUNHCR職員とネットワークを構築する機会を得ました。このことにより今現在、選択肢が広がってきています。

平和構築業界は今後、さらに面白くなっていくと思います。今回の研修員を見ても、各国政府機関職員・NGO出身者・民間企業経験者・研究者等、多種多様なメンバーが顔を合せました。新鮮な風が勢いよく吹き込んでくるこの業界には、熱い信念を持った仲間たちが集まってきています。ぜひ、新しい風として、多くの方々にこの事業に参加していただきたいと願っております。

平成20年度研修員

南部　成子